

「主に対するように」

コロサイの信徒への手紙 三章一八―四章一節

南山教会 二〇二五年八月三十一日

村山盛芳

礼拝堂にお集まりくださった皆さま、おはようございます。シルバーホーム「まきば」、名古屋東教会をはじめとしてYouTubeで礼拝にご参加いただいている皆さま、おはようございます。今日も一緒に、みことばに聴きましょう。

今日の箇所は「家庭訓」と呼ばれるテキストです。同じような家庭への訓戒が、エフェソ、ペトロの手紙等、新約の中で、最も後の時代に書かれた書物群に見いだせます。紀元一世紀末の教会の中で、議論の中心として語られていた事柄が伝承の下地になっているのでしょうか。それで「家、家庭」という問題が、紀元一世紀の教会の重要な課題であったことが分かるのです。ヘレニズムの世界では、「家庭訓」、つまり家庭の秩序を教え、その成員ひとり一人に守るべき約束事を告知することが、家々の習慣であったというのです。いわゆる世間から教会が問われた「家、家庭」について、教会はどう考えていたのでしょうか。

初代教会、最初そこに集った人々は、終末的希望に生きていました。まもなく世界は終りを迎える、再び復活の主が来られ、神の国が完成する。その時にはこの世の秩序のすべてが無くなってしまふ。だから神の国以外の世俗のことで、あれこれ、心を使い、思い煩うのは罪だと考えていました。家、家族もまた同様で、一人ひとりが、それぞれに自分の救いを達成しなければならぬ危急の時だ、というのです。

しかしやがて時代が移り、終末の遅延が語られるようになります。神はすべての人が悔い改めるように、ひととき終末を猶予してくださっている。聞いて信じるかどうかはともかく、この世のすべての人が福音を耳にするまでは、神は忍耐し待っていてくださっているのだ、ということです。すると、今度は日常の生きる場「家、家庭」がクローズアップされるのです。初代教会の人々にとっては、真の家、真実の家庭は「教会」でした。教会に集う人々が、家族、神の家族だったのです。それならば世俗の家庭、家とは一体どういう意味を持つのか、その問いへの応答が、今日のテキストなのです。

後半は「奴隸たち」への教えが記されています。奴隸制度を当然視していて、これに対する批判は此処にはありません。奴隸は生かさず殺さず、徹底的にこき使われ、搾取されたかという、それ程単純ではありません。そもそも奴隸は高価なのです。主人の性格によりけりですが、賢い主人は、一人ひとりの奴隸の能力や資質を鋭く見抜き、有効に用いようとしたのです。人間を賢く働かせようとするなら、脅しだけでは駄目です。奴隸の中には主人の右腕として、家の興隆や繁栄にすこぶる功績があった者もありました。そして主人はその努力にきちんとした形で報いたのです。

最初の訓戒「妻たちよ、夫たちよ」、「仕えなさい、つらく当るな」、これらの言葉は、今の私たちにも、実際の事柄として迫ってきます。ただ素直に聞けるだろうか。結婚式の時に、この個所が読まれることも多いですが、この個所の「妻と夫」を入れ替えて、二回読むという牧師もいます。

この個所で、最も考えさせられるのは、親子の関係についてでしょう。子に対しては「どんなことに対しても、両親に従いなさい」。「両親に従え」というみ言葉を、今の子どもた

ちはどう聞くでしょうか。面白いのは、最初は「両親」となっていて、次には「父親よ」という勧告が来ている。やはり親の問題は、父親がらみである場合が多いということでしょうか。「子どもをいらさらせるな」。この言葉は、絶妙です。いらさらせないことが、子育てのポイントだと教えています。なぜなら次の言葉「いじけるといけない」とは「勇気を失う」「気落ちする」。「いらさら」とははっきりしない、優柔不断などつつかずな態度によって引き起こされます。そして、それは子どもから生きる勇気を奪うのだということです。

どれももつともな仰せですが、「あなたも行つて同じようにしなさい」と言われると、いささか難儀な訓戒です。ただ、この家庭訓が、当時のヘレニズムの常識と異なっているのは、妻や子どもや奴隷ばかりでなく（つまり弱く、従う立場の者たちとみなされていた者たちだけでなく）、夫、父親、主人という上の強い立場の者に対しても、同じように心得を語っていることです。しかし、最も異なるのは、「主にあつて、主にふさわしく、主に喜ばれるために、主を畏れつつ」という言葉が必ず付け加えられていることです。「家庭」という最も基本的な人間の生きる場で、夫と妻、親と子、主人と奴隷という人間関係は、ただこの二者によって、成り立つのではないことが強調されていることなのです。家庭の中の人間関係も、ただそこにいる人間だけでは、健やかな関係は営めません。人間だけでは必ず破たんするということです。だから、み言葉はこう語ります。主に対するように、人間と人間のつながりの根本に「主がおられ」その絆によって、結ばれているということなのです。それは祈りであるし、とりなしであるし、ゆるしであるし、叱責もあるでしょうが、根本に、主の働きを、主の慈しみ、憐れみを求めるしか、その絆は保たれないのです。

英語の「Home」を日本語に訳した人は、内村鑑三です。彼は家庭についてこう発言しています。「家庭とは、神より受けた者がその愛を相互に交換する所であります。これはそれゆえに教会の一種であります。ただ家庭にありては、愛が少数者の間に限られるのと、靈魂の愛に加うるに肉体の天然自然の愛をもつてするの差違があるまでであります。教会を縮めたものが家庭でありまして、これをひろげたものが国家であります。家庭は国家の基本であると言いますのは、これは国家の単位であり、また縮画であり、また小模範であるからであります。愛は発動的のものでありまして、これは外から打ち込むことのできるものでなく、また命令をもつて引き出すことのできるものではありません」。

それはひとり一人の人生に、生命に、主が深く手を伸ばし、関わっていただくからです。どんな生命も、人間の勝手は判断で打ち込んだり、命令をもつて引き出すことはできない。